

韓国の絵本——日本から見た 10 年

執筆者：竹迫 祐子

掲載誌：「サンサン」 2011年4月 サン社（韓国）

日本における韓国絵本、事はじめ

日本で、韓国の絵本が広範な注目を浴びるきっかけになったのは、2000年に開催された韓国絵本原画展「オリエの世界から」だった。

国際子ども図書館の開館を記念し、日本の“子ども読書年”関連事業として取り組まれたこの展覧会では、代表的な17人の絵本画家とその作品250点が紹介された。その豊かさ、健康的な明るさ、何より、絵本に対する熱い情熱とパワーに、多くの日本人が圧倒され感動した。とりわけ、絵本の作家、出版社、私たちのような絵本美術館の人間にとっては、大きな衝撃で、まさに、日本における韓国絵本開眼の時であったように思う。

勿論、韓国にはそれ以前にも絵本はあったし、韓日の絵本交流もあった。だからこそ、この展覧会は実現したものである。松居直氏をはじめとする幾人かの人たちは、早くから韓国の絵本に注目し、紹介に努めておられたが、本展が広範な人たちが韓国絵本の魅力を知るきっかけになったことは間違いない。

2003年からNHKで放映がはじまった韓国ドラマ「冬のソナタ」(KBS 2002年制作)以降、高まる韓流ブームも追い風となって、その後、次々に韓国絵本は日本に紹介され、翻訳出版がつづいている。2004年には絵本学会が大会に絵本画家イ・ホベック氏を招き、翌年の同会誌「BOOKEND」では「韓国絵本が熱い!!」という特集を組んで、韓国絵本を紹介、イ・オクベ氏と佐々木宏子氏(当時の絵本学会会長)との対談を行った。絵本美術館の木城えほんの郷や安曇野ちひろ美術館等でも、それぞれ独自の視点で韓国絵本原画展を開催。わずか1時間半で行き来できる両国の間では、日増しに絵本交流も充実を増してきた。

日本から見た韓国絵本

「オリエの世界から」で紹介された『やまになった巨人』(リュウ・チェスウ)のパワフルで大胆な構図。韓国の絵画的伝統を感じさせる躍動感溢れる『きこりとトラ』(イ・ナミ)の線。おおらかで健康的な明るさを持つ『フンプとノルフ』(イ・ウギョン)。『マンヒの家』(クオン・ユンドク)や『ソリちゃんのチュソク』、『あかてぬぐいのおくさんと7にんのなかま』(イ・ヨンギョン)の緻密で丁寧な絵からは、韓国の生活文化を読み取り、『子犬のウンチ』(チョン・スンガク)や『うしとトッケビ』(ハン・ビョンホ)からは温かなユーモアのセンスを感じ取った。個々の絵本からの印象だけでなく、紹介された絵本と原画から、日本の絵本関係者が大きなインパクトを受けたのは、絵本に真正面から向かう真摯な姿勢であり、懸命な思いであったと私は思う。

日本では、第二次世界大戦で韓国を含め、多くの国々に取り返しのつかない犠牲を強いた日本故に、二度とどの国の子どもたちも戦場に送らないという固い決意を持って、創造的な絵本作りに励み、1960年から70年には今も読み継がれる数々の絵本を多く生み出した。しかし、1990年代のバブル経済の崩壊を

経て、この時期、多くの日本人は経済成長と引き換えに多くのものを失ってきたのではないかと感じていた。絵本も他の流通商品と同様に市場に溢れかえっていた。毎年 2000 冊から 3000 冊の新刊絵本が出版されるという状況は、飽和状態である。その反面、バブル崩壊とそれに伴う出口の見えない不況は国民生活を圧迫し、閉塞感と無力感を高めていたし、それは今もつづいている。

この現実には、絵本は何ができるのか？ 絵本はどうあるべきなのか？

日本の絵本が抱えた問いの答えを導く何かを、韓国絵本と絵本の根底を流れる深く豊かな韓国文化は持っていた。

今、韓国絵本に思うこと

昨年、CJ 文化財団が取り組んだ特別展「韓国の絵本」は、その充実と確実な発展を示すものだった。日本が 40 年で歩んできた道を、韓国の絵本は 20 年で進んだ。そうすると韓国の絵本関係者は、韓国には基礎がない・・・と言われるが、今や実力は確実に高まっていることは一目瞭然であろう。

『うさぎのおるすばん』（イ・ホベック）や『かあさん、まだかな』（キム・ドンソン）、『よじはんよじはん』（イ・ヨギョン）は、日本でも人気の絵本であるし、『ヨンイのビニールがさ』（キム・ジェホン）はそのテーマから話題となった。ボローニャ・ラガッツィ賞を受賞した『地下鉄は走ってくる』（シン・ドンジュン）や野間国際絵本原画コンクールで次席となった『またいどこ』（パク・チョルミン）の翻訳も期待される。さらに若い世代の活躍も目覚しく、欧米で絵を学んだり、国際的な絵本賞に参加する人も増えて画風は多様化し、ある意味での無国籍化も進んでいる。

先日、東京上野の国際子ども図書館で、クオン・ユンドク氏を招いて、「慰安婦 “から『コッハルモニー—花のおばあさん』へ～絵本で社会を語るということ」と題した講演会が開催された。『コッハルモニー』は、2006 年春からスタートした韓国・中国・日本の絵本作家 12 名による”韓・中・日平和絵本プロジェクト”の一環として、ユンドク氏が創作した絵本である。彼女は、20 歳の頃から抱えつづけた日本軍慰安婦についての問題意識を、30 年の歳月を費やし、丹念な調査と元慰安婦のおばあさんとの交流、10 冊を超えるダミーの制作を経て、一冊の絵本に結実させた。問題を知れば知るほど深まる嫌悪や憎しみの感情を、読者である子どもに手渡し得る普遍的なテーマに昇華させるまで歳月を費やしたという。そして、彼女は講演の終わりを「すべての問題は大人のなかにあるのかもしれない」。「絵本が社会問題を扱う場合、作家がすることのできる話は、大人が何を、どのくらい、なぜ、うまくやれないでいるのか、そんなことだけかもしれません。そうした真実を、子どもたちに話して理解させることができるならば、子どもたちは自分たちの世の中をもう少し明るく清清しく変えていくことができるのではないだろうかと考えます」と結んだ。

この話を聞いていた多くの人（ほとんどが作家、編集者等の関係者だったが・・・）が、今、絵本に関わる日本人たちにこそ、この話を聞いてほしいと、口々に語り合っていた。

夢や空想を伝える絵本も本質的には同じである。かのモーリス・センダックは、「子どもたちがごく幼いうちからすでに自分を引き裂く感情とはお馴染み」で、「恐怖と不安は彼らの日常生活の本質的な一部」であり、「彼らは常に全力

を尽して欲求不満と戦っている」。そして、「子どもがそれらから解放されるのは、空想によって」なのだと言いつつ、「人生を偽りなく反映すること—空想の人生においても、現実の人生においても—は、あらゆる偉大な芸術の基礎です」と語る。空想は現実の人生を生きることの励みや慰めになっても、逃げ場になっ

てはいけない。

韓国と日本の絵本のこれから、未来

『RUN TOTTO』という韓国の新刊絵本を見ながら、なぜ、こんな絵本が今の日本ではなぜ生まれないのだろう・・・と話題になった。少女の目を通して、競走馬や競馬場に集まる人の様々な様子が表情豊かに描かれている。中に左右観音開きの頁を広げると、一斉に走り出す馬たちが力強く描かれている、迫力ある絵本だった。

確かに、今、日本では売れるかどうかだけが基準であるかのように、実験的、挑戦的な絵本の試みを逡巡する傾向は益々強まっている。それなのに、奇をてらった絵本は結構出てくる。また、見た目は綺麗だけれど内容が薄い絵本、主人公の人気に乗っかっただけの絵本等々。毎月 200 冊を超える新刊絵本の中で、一体何冊の絵本が 10 年後 20 年後にも生きているのだろう。

この問題は韓国、日本、いや世界中で共通する問題であろう。日本同様、韓国にだって、どうでもいい絵本は山ほどある。

韓国の絵本も日本の絵本も、問題はこれからだ、と私は思う。絵本の普及は国内外の市場の拡大を前提に、絵本作家予備軍を養成し、その中からは国際的な絵本コンクールで実力を認められる逸材も出ているが、一方で安易に絵本作家を思い立つ人も少なくない。デジタル・テクノロジーは印刷を飛躍的に進歩させ、美しい絵創りも印刷も容易にした。大量の絵本が出版されては消えて行く。絵本は大切な文化であると言いつつ、使い捨て文化の量産は繰り返されている。

絵本美術館もそうだが、絵本の創作や出版で金儲けはできない。それが目的なら、他の道を選んだ方がいい。

真に優れた文化として絵本を育てて行くには、創ることも、普及することも、読むことも、いずれも丁寧に時間を掛け、かつ継続していくことしかない。何を描くか、何を伝えるかを真摯にみつめ、自らに問い直しつつ、良いものを創りつづけていくでこそ、次の時代に繋がっていく。今、一冊の絵本と出会うことが、その子の中で生きてくるのは、数ヵ月後かもしれないし、数十年後かもしれない。絵本の活動は、そんな息の長い、種蒔く仕事である。生きている内に実りを見ることができないかもしれない仕事に、私たちは取り組んでいる。

この 10 年、日本の絵本は韓国絵本から勇気と励ましをもらった。これから、互いに刺激しあいともに高まっていく時代を迎えたい。